

ReBirth リバース

上位世界から下位世界へ

2

kobayashi takashi

小林 誉

Illustration: 海鷗げそ

ドラン

監視&伝令役を担う幼竜。頭が良く大人しい性格。強力な咆哮を放つ。

ファフニル

光竜連峰に棲息するドラゴン。人化すると女性の姿となる。エスト達に大いなる使命を課す。

ディアベル

妖艶なダークエルフ。200歳。戦争に敗れ奴隷となった元軍人。男勝りな口調で話す。

シャリー

天真爛漫な犬族の娘。6歳。ディアベルを姉のように慕う。剣術が得意。

リムリック

グトリニル聖王国の王子。自ら前線に立つ行動派。敵対する教会の秘密を探る。

クロノワール

アルゴス帝国の第三皇女。兄と帝国の皇位継承を巡って争うが、劣勢に立たされる。

クレア

猫族の少女。14歳。奴隷として運ばれる道中、エストに救われ仲間となる。

エスト

本編の主人公。15歳(精神年齢30歳)。上位世界(地球)からの転生者。経験値が増加するスキルを持つ。

ガルシア王国でパーティーを組んだ冒険者、アミルやレレーナと別れた翌日。
 俺——エストはクレア、ディアベル、シャリーを連れ、ガルシア王国の王都を出発した。乗合馬車に乗り、ここから半月ほど北上する予定だ。
 出発前には商人ギルドに立ち寄り、地図を購入しておいた。地図によると、ガルシア王国は大陸のほぼどに位置している。
 その北西にあるのがアルゴスという帝国だ。国力はこのガルシア王国よりもやや低いようだが、長い歴史を誇る由緒ある国らしい。
 かつての戦乱の折、このアルゴス帝国だけは他国から侵略を受けなかったとか。だが最近では皇帝の継承争いで揉めている、とギルドで聞いた。
 なぜそんな国を目指しているかというと、アルゴス帝国には数多くのダンジョンが存在し、未だ発見されていない伝説級の武器や防具が眠っていると小耳に挟んだからだ。
 未発見なのになぜ眠っているとわかるんだとか、突っ込みたい部分が多い。だが急ぐ旅でもない



ので、ゆっくりと探索するつもりでいる。

初めての長旅なので、当初シャリーは大喜びしていたが、行けども行けども代わり映えしない景色と不味^{まず}い簡易食、そして振動による尻^{しつぽ}へのダメージという三重苦に、みるみるテンションが下がっていった。尻尾^{しつぽ}が力なく垂^たれ、耳はペタンと倒れている。

そんな彼女を見てみると、なんだかこちらまで胸が苦しくなってきた。

なんとか気晴らしをさせなければと頭を捻^{ひね}って考え出したのが、木を削って作るフリスビーだった。我ながらなかなかの出来で、シャリーも喜んでくれた。

ただ、最初はお互いに投げ合っていたのに、いつの間にか、俺が投げた円盤をシャリーが取って来る、という遊びに変化していた。犬族だからだろうか？

本人が嬉しそうなので飽きるまで付き合う。体を動かしたことで満足したのか、その後は見違えるほど元気になったので安心した。

長い旅もそろそろ終盤を迎え、アルゴス帝国の首都まであと半日に迫った。

その時、表示しっぱなしにしていたマップスキルに反応があった。

先行する青い光点を、いくつもの光点が追従^{ついでん}している。状況や移動速度から考えて、誰かが何者かに追われているようだ。

放っておく訳にもいかず、御者^{ぎしや}に様子を見てくると告げて、俺達は馬車を飛び出した。

「ご主人様、敵ですか？」

「わからん、だが油断するなよ」

ゴールドランクの冒険者となるまでレベルの上がった俺達は、馬並みとは言わないまでも、かなりの速度で走ることが出来る。重い荷物を載せた馬車なら軽々追い抜けるほどだ。

その速度を生かして駆けると、一台の馬車が黒ずくめの集団に襲われているのが見えた。

俺達に対しては敵意が無いため、マップ上ではまだ敵と判定されていない。

だがこの状況で黒ずくめを正義の味方と思う奴は居ないだろう。とりあえず日本人的^{はんがん}な判官びいきで、弱そうな方に味方する事にした。

そのまま馬車に近づいて行くと、近寄る者は全て敵とばかりに黒ずくめが矢を放ってきて、ようやく判定が敵になった。

敵の数は全部で十人ほどか。当てるつもりで放ったのだろうが、俺達相手ではそんな攻撃は威嚇^{いかく}にもならない。

走る速度を落とさずに魔力を練り上げた俺は、炎の槍を黒ずくめ達に向かって放つ。

突然の乱入に混乱した様子を見せた黒ずくめ達も、飛んでくる炎の槍を避けると、半分ほどが剣を抜いて襲い掛かってきた。

「主殿^{あるじ}、ここは私が」

「シャリーもやる」

ディアベルが瞬時に詠唱を終えると、黒ずくめ達の足元の地面が隆起^{むく}して鞭状^{むち}に変化した。

土の鞭は黒ずくめ達を捕らえようと激しく動くが、奴らの動きも機敏だ。二人ほど拘束しただけで後は碎かれてしまった。

仲間を救助しようとする黒ずくめ達に、俺とシャリーが迫る。

子供と思って侮^{あは}つているのか、顔に笑みを貼り付けて剣を構えた黒ずくめ。

しかしその剣が弾き飛ばされ、驚きで固まっている内に、側頭部にシャリーの剣の柄^{つか}を叩き込まれて意識を刈^かり取られた。

俺に向かってきた二人のうち、一人は突きを放ち、もう一人は俺の足を斬りつけてきた。避けにくい箇所を狙って一気に片を付けるつもりなのだろう。

だが俺の余裕は崩れない。足に迫る剣を踏みつけて折り、突きをかわすと、その男の顔面を拳で捉えた。重い一撃を顔に受けた男は悲鳴も上げずに崩れ落ちる。

剣を無くした男が目を狙って抜き手を放ってくるが、それをかいくぐり、ひじを鳩尾^{みぞおち}にめり込ませる。男は胃の中身をぶちまけて地を転がった。

それを見て不利を悟ったか、黒ずくめの男達は仲間を見捨てて撤退を始めた。やれやれ、なんとか馬車を助けられたようだ。

馬車の護衛と思われる騎士らしき男が二人、剣を抜いたままこちらを警戒していた。

警戒するのはわかるが、敵だったら助けたりしないだろうに。

「ルシウス、マルクス、助けてくださった方に対して失礼ですよ。武器を下げなさい」

「はっ」

馬車の中から軽やかな声が聞こえて、二人の騎士は不承^{ふしょう}ながら武器を収めた。

少し軋^{きし}んだ音を立てて馬車の扉が開かれると、一人の美しい少女が降りてきた。

よほどの金持ちなのか、旅路には似つかわしくない金糸の入った豪華なドレスを着ている。

明るい金髪を腰まで伸ばし、キリリとした顔からは利発そうな印象を受ける。そして服の上からでもわかる見事なプロポーシオンだった。

洗練された物腰なので、かなり裕福な貴族なのだろう。だが、続く言葉に俺は絶句した。

「初めまして旅のお方。助けていただいてありがとうございます。私の名はクロノワール・ビュザオ・アルゴス。このアルゴス帝国の第二皇女です」

……皇女様と来たもんだ。まさか本物のお姫様にお目にかかる日が来るとは思っていなかった。この国では揉め事を起こさないつもりだったが、さっそくこれじゃ難しそうだな。

「助けていただいたのに何の御礼もしないのは失礼に当たりますが、何分今は持ち合わせがございません。そうだわ！ 城へ同行していただけないでしょうか？ そうすればお礼をお渡しする事が出来ますので」

「いえ、その、間に合ってますんで。お気持ちだけで結構です。それでは」

皇女なんて身分の人間、トラブルのにおいしかない。この場はさっさと立ち去るのが正解だろう。



回れ右してそそくさと乗合馬車に戻ろうとする俺達の前に、さっき武器を構えていたお付きの騎士二人が回りこんできた。『しかし回り込まれてしまった!』というやつだ。

何が気に入らないのか、彼らの表情は非情に険しい。

「貴様! 姫様のお誘いを断るとは何事だ!」

「そうだ! 貴様の意思などどうでもいい。言われたとおりに城まで付いて来れば良いのだ」

……何なんだろうな、こいつらは。これだけ高圧的な物言いをすれば、反感を買うというのがわからないだろうか?

皇女のお付きに手を上げるのはどうかと思ったが、他に護衛も居ないみたいだし、ここは遠慮なしに行こう。俺は基本的に礼には礼で、無礼には無礼で返す方針の人なのだ。

「そこまで言うなら付き合ってもいいが、お前ら二人の態度が気に入らん。無礼を詫びて頭を下げる」

人差し指を地面に向け、土下座を要求する。

俺の台詞に姫様は少し驚いた表情をしていたが、お付きの二人はそうではなかった。皇女の護衛ともなれば、腕はもちろん家柄もそれなりというのは簡単に予想がつく。

今まで俺のように反抗してきた人間が居なかったのだろう、彼らは顔を真っ赤にして剣を抜き放った。人の事は言えないが、瞬間湯沸かし器みたいな奴らだな。

「貴様! 我らにそんな口を利いて無事で済むと思っているのか!」

「そうだ！ 先ほどは刺客を撃退しようだが、所詮不意を突いただけ。我らの負ける道理がない！」

いちいちセツトでしゃべるなよ鬱陶しい。

二人はよほど頭にきているのか、姫様の事などお構いなしに斬りかかって来た。こんな単純な護衛しかないなんて、この姫様も苦勞してそうだな。

「はあっ！」

「くらえ！」

二人のレベルは18と19だ。これならシャリーが一人で戦っても余裕で勝てるだろう。

左側に居る男のあくびが出るほど鈍い斬撃をひらりとかわし、素早く後ろに回り込んで、両膝に蹴りを入れてやった。いわゆるヒザカックンというやつだ。

驚いた表情で尻餅をついた男を放置し、もう一人と向き合う。

俺の頭を狙った剣を少しだけ体を捻ってかわし、剣を振り下ろした状態の男に喉輪をかまして、そのまま地面にひっくり返してやった。

軽くあしらわれたのがショックだったのか、尻餅をついた男は果然とした表情で固まっていた、地面に倒された方はまともに息も出来ないのか激しく咳き込んでいる。

売られた喧嘩を買っただけとは言え、姫様の護衛相手にやらかしてしまったかな、と少し気になったが、どうやら杞憂だったようだ。当の姫様はクスクスと笑っていたのだから。

「凄いですねあなた。その二人が子供扱いされるなんて初めて見ました。申し訳ありません。その者達の無礼はお詫びします。どうかここは怒りを収めて、私について来ていただけないでしょうか？」

そう言うと、姫様はペコリと頭を下げた。護衛達が何やら喚いていたが、俺はそれを聞き流す。

この手の貴族は人とも思わない高慢きな連中ばかりだと思っていたので、他人に頭を下げるなんて意外だった。部下の不始末を認めて謝罪したとなると、姫様の評価を少し変える必要がある。礼儀正しく頼まれたのであれば、こちらも礼儀をもって応えるだけだ。

「そこまで仰られるならご同道しましょう。その前に、あそこで伸びている刺客を捕らえてはどうですか？」

「ありがとうございます。ほらあなた達、いつまでも呆けてないであの者達を捕らえてきなさい」

姫様の言葉で護衛の二人は弾かれたように動き出した。その間、俺達は乗合馬車に戻り、姫様達と同行することを伝えるに行く。

残念な事に、俺達の都合で馬車を降した場合、代金の差額はもらえないようだった。

乗り込んだ姫様の馬車はかなり頑丈で立派な造りをしており、乗合馬車より一回りは大きい。座り心地もかなり良く、窮屈な思いはしないで済みそうだ。

片側に俺達パーティーが座り、反対側に姫様と護衛達が座った。御者は専門の者が外で引いている。捕らえた刺客達は馬車後部の荷物置き場に縛り上げて放置していた。

道中姫様との話は途切れる事無く続いた。俺達の目的やランクの事が主な話題だった。全員子供のような年齢でゴールドランクだと言ったら随分驚いてたな。

護衛の二人は俺達のレベルと称号を知ると急に顔を青くして俯いていた。自分達の態度次第で俺達が敵対した場合、姫様がどうなっていたかを想像したのだろう。これに懲りて態度を改めてもらいたいものだ。

そして俺は一番気になる事を質問した。なぜあんな場所で襲われていたのか、だ。

「簡単に言えばお家騒動です。私には兄がいるのです。自分で言うのも気恥ずかしいのですが、私は臣民から人気があります。帝位継承順位は兄のクラウデイスが上とはいえ、兄は自分より臣民に支持される私が邪魔なのでしょう。過去に何度も危ない目に遭っているのですよ」

姫様は何でもないように答えた。しかしさっき、第二皇女と言っていた。つまり、一人お姉さんが居るって事になる。

「姉は既に他国へ興入れしておりますから、帝位継承権は消失しています」

なるほどね。皇子様にとって邪魔者は一人だけなのか。

しかし、お家の事情を知り合ったばかりの俺達に話してもいいのかね？ そこを聞いてみると、彼女はクスクスと笑いながら答えてくれた。

「もはや公然の秘密となっていますから、臣民なら子供でも知っています」

何度も命を狙われているというのに、なかなか豪胆だ。貴族社会ってのはこれぐらい神経が図太

くないと生きていけない世界なのかもね。

そうやって俺達が話している間に馬車は門をくぐり、帝国首都アルゴスに到着した。

初めて訪れる街並みを馬車の窓から観察すると、人の流れはガルシア王国と大差ないが、町並みは少し違う。趣があるというか歴史を感じるというか、古い建築物が多いのだ。

それでもボロいという印象は受けない。どれも綺麗に整備されていて、清潔さを保っている。

跳ね橋を降ろして堀を渡り、城の中に入る。馬車を降りた俺達は、豪奢だがそれほど広くない部屋に通された。

しばらく待つとメイド達が数人、移動式トレイにお菓子と紅茶を載せて現れた。ほぼ時を同じくして、ラフな格好に着替えた姫様が入室する。ラフとは言っても生地からして高級品だとわかる。一体金貨何枚分か予想もつかない。

「お待ちせして申し訳ありません。さあ、召し上がってください」

言われて俺達はお茶に手を伸ばす。シャリーなどは初めて食べるお菓子に興奮したのか、おいしおいしと連呼していた。

それを微笑みながら見ていた姫様が、小さな袋を差し出してきた。

「これは？」

「助けていただいたお礼です。些少ですがお納めください」

中を確認すると金貨が十枚以上はある。ちょっと助けただけなのに大盤振る舞いだな。だが、帝

族を助けた対価とすればこんなものかもしれない。

もらえる物はガラクタと病気以外はもらっておく方針なので、遠慮なく受け取る。

「ありがとうございます。では遠慮なく……」

「ところで、あなた達を腕の立つ冒険者と見込んで頼みがあるのです」

金貨の袋を懷に収めている最中に、さも当然とばかりに姫様が口を開いた。

ほら来たよ。やっぱり裏があったか。これで金貨十枚以上は話がうま過ぎると思ったんだよな。

「我が国に古くからあるダンジョンに潜って、あるアイテムを回収してもらいたいのです」

ダンジョンと聞いてピクリとした俺の反応が気に入ったのか、姫様がニコリと微笑む。

しょうがない、お礼だけでもらっておさらばしようと思っていたが、話だけでも聞いてやるか。

「アイテムの回収ですか。それは具体的にはどんな物なんです？」

「継承の指輪です。実は、正統な帝位継承権を得るにはその指輪が欠かせないので——」

姫様の説明によるとこんな理由だった。

アルゴス帝国の帝位継承の際には、毎回そのダンジョンから持ち帰った指輪を継承者の証として、貴族や臣民の前で提示しなければならぬそうだ。この指輪は膨大な魔力で生成され、現皇帝が持つ指輪の魔力が切れると、ダンジョン内に新たに出現する仕組みらしい。

魔力を感じできる人間ならひと目で本物か偽物かわかるほど強力な魔力を秘めているようだから、誤魔化そうとしてもすぐにバレる。

一応継承順位は決められているが、それは暫定^{ざんてい}でしかなく、決められた期間内に先に指輪を持って帰ってきた者に、第一帝位継承権が与えられるようだ。

決められた期間は現皇帝が退位を発表してから一ヶ月間だけ。その間に誰も指輪を持ち帰ることが出来なければ、暫定の継承順位が優先される。

指輪を取って来る者は代理人でも認められるが、人数は五人までとされる。

つまり、順位の高い皇子側からすればわざわざダンジョンに潜る手間をかけなくても、姫様側の妨害をするか、姫様の命を奪ってしまえば帝位が転がり込んでくるという訳だ。

姫様側からすれば一発逆転と自身の身の安全のために、指輪を確保して皇子を排除するしかない。そのために腕の良い冒険者を探していたが、帝都やその周辺のギルドには皇子一派の妨害工作及び、姫様に協力する冒険者は見つからなかったようだ。姫様自身が足を運んで説得しても上手くいかず、あぐく帰り道に襲われた。そこを俺達が助けたという訳だ。

「……話はわかりました。ただ、気になる点がいくつかあります」

「何でも聞いてください」

「まず、冒険者に拘^{こわ}る必要は何ですか？ 劣勢に立たされているとは言え、皇女ともなれば自分の配下……例えばそこに立っている護衛の二人でも良いんじゃないですか？」

当然とも言える俺の指摘に、姫様より強く反応したのが後ろの騎士達だった。

一瞬口を開きそうになるのをグッとこらえ、顔を真っ赤にして黙り込む。悔^{くや}し気に唇を噛むその

様子を見て、そんなに気に障る事を言っただろうかと俺は首を傾げた。

「恥ずかしながら、私に仕えている騎士達では兄が雇った冒険者達の相手は荷が重いでしょう。聞くところによると、兄の雇った冒険者のランクはアダマントイトであるとか。この国には僅か数人しか居ない強者達です」

アダマントイト……今までには見たことの無い、最高ランクの冒険者だな。

アダマントイトに昇格する条件はかなり厳しいようで、ドラゴンやそれに匹敵する魔物の討伐実績と、ギルドに対する貢献度も重要になるらしい。俺達でも正面から戦えば危ないかもしれない。ヤバイ相手ならなるべく遠慮したいが……断るのは早計だ。まだ気になる点はある。

「そのダンジョンには、指輪以外に何か特別な装備が隠されているという話はありませんか？ 例えば伝説の武器とか防具とか」

俺達にとっては指輪よりそっちの方が重要だ。強力な装備はパーティーの戦力アップと生存率アップに繋がるからな。少々危険を冒しても手に入れる価値がある。

「何代か前の帝位継承の試練の時に、出現したダンジョンマスター達が強力な装備を落としたという話なら聞いたことがあります……なにぶん古い話ですので、確証はありません。父の時はそもそも一人っ子だったので誰とも争わず、指輪だけさっさと回収したと聞いています」

ふむ、無い可能性の方が高いのか。それにしても、今気になる事を言っただけ。

「ダンジョンマスター達？ 複数なのか？」

「このダンジョンに現れるダンジョンマスターは、最低二体から三体だと記録に残っています。でもダンジョンマスターと戦わなくても指輪を持ち帰ることは出来ますので、あえて戦わなくてもいいと思います」

そうは言うが冒険者にとってお宝は何より大事なものだ。せっかくダンジョンに潜るなら、必ず回収しておきたい。きっと皇子側の冒険者も同じように考えるはずだ。冒険者とはお宝を求めてダンジョンに挑む人間なのだから。

とりあえず聞きたい情報は聞けた。危険があり難易度は高いが、それを上回る報酬とお宝が手に入るなら、この話を受けよう。

「では具体的な報酬の話をしましょう。俺達をどんな条件で雇ってくれますか？」

自分達を安く売るつもりは無い。期待したほどの報酬が出なければ、このまま席を立っておさらばするまでだ。姫様には悪いが、ボランティアで手伝ってやる義理も無い。

「報酬は金貨百五十枚。前金で金貨五十枚をお渡しします。指輪を持ち帰った場合に残りの百枚を。働き次第では追加報酬も考えています」

金貨百五十枚か……日本円で何億ぐらいだろう？ どうやらこの姫様、俺達をかなり高く評価してくれているようだ。

ふと横を見ると、あまりの金額の大きさにクレアやディアベルが固まっていた。無理も無い。普通の人なら一生遊んで暮らせる金額だろうからな。日本で言えばジャンボ宝くじの当選金を提示さ

れたようなものだ。

この条件なら悪くない。皇子側の妨害や相手の冒険者も気になるが、勝利した場合のメリットはかなり大きい。金銭面だけでなく、次期皇帝とのつながりを持てるのは後々色々と便利そうだ。これは賭けに乗ってみるか。

「わかりました。ではその条件で仕事をお引き受けします」

「良かった！ あなた達ほどの冒険者が味方してくれるのであれば、勝ち目が出てきます」

姫様の顔がバアッと明るくなった。味方となる冒険者が見つからなくて、実は結構追い詰められていたのかもしれない。だがまあ、俺が味方についたからには大船に乗ったつもりで安心してくれ。タイタニックや戦艦大和のように、とても安定した航海を約束しよう。

※

姫様から依頼されたダンジョンは、ガルシア王国のものとは違い、誰でも入れる気軽な場所ではなかった。入口にはこの国の兵士達の詰め所があって、人や動物、魔物などが入り込まないように鉄柵で囲われている。

どうやらここに居る兵士は入場者の管理だけでなく、万が一ダンジョンから魔物が溢れてきた場合に時間を稼ぐ役割もあるようだ。その兵士達と、俺達に同行してきた姫様が話しているのを横目

で眺めながら、俺は周囲を観察していた。

今回、俺達はろくに準備する事も無く直接ダンジョンに来ていた。と言うのも、既に皇子側の冒険者はダンジョンに潜っており、出遅れている姫様側には一刻の猶予も無かったからだ。

ただでさえ向こうの方がランクが高いのに、先手まで奪われている。状況はかなり悪い。

念のためにマップスキルで、周囲に居る兵士達の敵意の有無、森の中に伏兵が居ないかを確認してみたが、特に反応はなかった。

話はついたのか、ダンジョン前のバリケードが退けられる。良かった。皇子派の妨害でダンジョンに入る事すら出来ないって事態は回避できたか。

まあ考えてみれば全ての兵士が皇子派ではないだろうし、中には皇女派や中立派も居るだろう。

「では、行って来ます」

「あなた達ならやり遂げられると確信しています。吉報をお待ちしていますよ」

さっそく中に入ろうとする俺達に姫様が……いつまでも姫様じゃ可哀想だな。クロノワールが笑顔で手を振り送り出してくれた。

護衛の騎士ルシウス達が用意してくれた携帯食料と地図を道具袋に詰め込み、俺達はダンジョンの入口へと進んだ。

「へえ……」

「ガルシアとは随分印象が違いますね」

「精霊も多いな」

「ここ、あんまりくさくないよ」

中に入ってしまったら進むと、俺、クレア、ディアベル、シャリーと、思い思いの感想が口から出て来る。

以前行ったところと同じく、ジメジメした上にかび臭くて暗い場所だと思っていたが、このダンジョンは少し違った。ある程度整備されていて、壁にはかがり火用の入れ物が等間隔で並んでいる。昔は別の用途で使われていたのかもしれないな。

アミル達が抜けて四人となり、パーティの戦力はかなり落ちている。

特に回復役が俺一人になったのがキツイ。仮に俺が敵にかりつきりになった時に誰かが負傷すると、最悪回復する暇もなくやられてしまう。今まで以上に慎重に行動する必要があった。

前衛は俺とシャリー、後衛はクレアとディアベル。アミル程ではないが、今の成長したシャリーなら十分前衛を務められるだろう。

道具袋から取り出した地図によると、このダンジョンの構造は下層に向かってほぼ一直線のゆるやかな下り坂になっている。階段が存在しないようなのだ。

太い道が中心にあり、脇道がそこから枝分かれしている形は、地図上ではちょうど太い一本の大本が書かれているようだった。

大木の一先端でダンジョンマスターが出現したという記録があるが、指輪が何処にあるかは不

明だ。と言うのも儀式の度に出現場所が変わるので、予測が出来ないらしい。面倒だが虱潰しに探索するしかない。

俺達の少し前を、ディアベルが使役するウィルオーウィスプが浮遊して、松明の代わりを務めてくれている。これは冒険者にとってかなりありがたい。

そもそも松明はそれほど先まで照らせないし、片手が塞がってしまう。片手が使えないと、いざという時に盾や武器を構えるのが難しい。

ウィルオーウィスプは、単純に周囲が明るくなる以上の恩恵を俺達パーティーに与えていた。

マップに先行した冒険者達の反応は無く、代わりに敵を示す赤い光点が迫っていた。

数は五匹。移動速度はあまり速くないので、十分に迎撃準備を整えられる。

「敵の反応だ。数は五、ディアベル、灯りを増やしてくれ。俺が前に出るからシャリーはその援護。クレアは敵が見えたら攻撃開始だ」

「了解した、主殿」

「はい」

「わかりました、ご主人様」

ディアベルが更に複数のウィルオーウィスプを召喚して、周囲を灯りで満たす。暗がりからの奇襲を避けるためだ。

一人先行した俺の視界に、光に照らされた敵の姿がぼんやりと見えてきた。一見元の世界に居た

コモドオオトカゲに似ていたが、あれとは違って全身が白い。顔はのっぺりとして目が無い。ペタペタと歩きながら、口からは先端が二つに分かれた長細い舌をペロペロと出し入れしている。コモドオオトカゲと違って、^{どうも}獐猛さは感じないが、とてつもなく不気味な外見だった。

『白大蜥蜴…レベル28』

まるで深海魚のように奇妙な姿だし、レベルも以前潜ったダンジョンの魔物より高い。それに毒の心配もある。コモドオオトカゲは噛み付いた獲物を仕留めるための毒を持っていたはずだ。こいつも同じとは限らないが、用心するに越したことは無い。

「みんな！ こいつは毒があるかもしれない。噛まれないように気をつけろ！」

仲間達が頷くのを確認すると、俺は魔法を放つべくイメージを固めていく。新たにレベルが上がった『氷結魔法レベル2』を試してみよう。今回使うのは、今まで役に立たないので使わなかった吹雪を起こす魔法だ。ちなみに鋭い氷の塊を飛ばす魔法は、強化されて槍状に変化するようになっていた。

射程に入った白大蜥蜴に向かって魔法を発動させると、俺の眼前で猛烈な吹雪が発生した。周囲の気温が一気に下がり、魔法の範囲外に居る俺達も寒さに震える。直撃を食らった蜥蜴達は爬虫類だけあって冷気に弱いらしく、移動速度が極端に遅くなった。

ノロノロと動く蜥蜴達に向けて、すかさずクレアが強弓を放ち、一匹を仕留める。それを合図に俺とシャリーは抜刀して斬りかかった。

反撃しようとするも体の動きが鈍い蜥蜴の体に俺達の剣が突き刺さる。

続いてディアベルの召喚したモグラに似た土の精霊ノームが、鋭い鉤爪を振るって蜥蜴の一匹を切り裂いた。残りの一匹にクレアが第二射を放ちとどめを刺す。それであっけなく蜥蜴達は全滅した。

俺達も力をつけているだけあって、これぐらいのレベルの敵なら難無く勝てるようになったな。

新たに獲得した『経験値アップ…レベル3』の恩恵か、かなり下のレベルの敵を倒しただけなのに全員のレベルが上がっていた。

●エスト…レベル42

『フロアマスター討伐』『不死殺し』

HP 848／848

MP 781／781

筋力…レベル5（＋4）

知力…レベル4（＋5）

幸運…レベル1（＋2）

▼所持スキル

『経験値アップ…レベル3』『剣術…レベル4』

※隠蔽中のスキルがあります。

新たなスキルを獲得できます。次の中から選んでください。

『幸運アップ』

『隠密…レベル2』

● クレア…レベル41

『フロアマスター討伐』

HP 591／591

MP 210／210

筋力…レベル4 (+1)

知力…レベル2 (+1)

幸運…レベル4 (+1)

▼ 所持スキル

『弓術…レベル4』『みかわし…レベル3』

『剣術スキル…レベル3』『扇撃ち…レベル4』

『強弓…レベル2』

● ディアベル…レベル38

『フロアマスター討伐』

HP 389／389

MP 592／592

筋力…レベル3 (+1)

知力…レベル4 (+1)

幸運…レベル3 (+1)

▼ 所持スキル

『精霊召喚(炎)(土)(風)…レベル3』『剣術…レベル3』

● シャリー…レベル34

『フロアマスター討伐』

HP 381／381

MP 120／120

筋力…レベル4 (+1)

知力…レベル1 (+1)

幸運…レベル3（+1）

▼所持スキル

『嗅ぎ分け…レベル2』『剣術…レベル3』

『大跳躍…レベル1』『みかわし…レベル3』

今回のレベルアップで、シャリーの『みかわし』がレベル3に上がっていた。

俺はどんなスキルを獲得しようか？ いい加減皆に比べて異常に低い『幸運』の値を何とかしたいが、今回は隠密のレベルを上げておく。一人での偵察も可能になるかもしれないね。

さあ、探索を続けよう。

実際にダンジョンに潜ってから気がついたが、クロノワールの用意してくれた地図と俺のマップスキルを比べると、若干ではあるが差異があった。

恐らくこの地図は、前回の儀式の時に作られたものなんだろう。

クロノワールの見た目が二十歳前後だから、その父親の歳となると四十〜五十歳ぐらいか。て事は、この地図が作られたのは最低でも二十年から三十年前だろう。

ダンジョンは内部の構造が頻繁^{ひんぱん}に変化するから、現状でこの地図はあまり役に立ちそうに無い。

加えて俺のマップスキルは、地形の把握は出来るが、重要なアイテムの位置までわかるほど便利な

スキルでもない。

風潰しに調べるしかないと言っても、適当に目に付いた部屋を調べていては時間がいくらあっても足りない。

となれば方法は限られてくる訳で、大通りを挟んだ右側か左側かを選んで、とにかく前進しながら、片側の部屋のみを順番に見て行くしかない。

当たりハズレの予想などできない状況では、どちらを選んでも同じ気がする。運任せなので、ここは俺達の中で一番幸運の値が高いクレアに決めてもらう事にした。

「私が決めるんですか？ ご主人様ではなく？」

「どっちが正解かわからないからさ。ここは運試しだからクレアに頼むよ。別に責任取れとか言わないし、軽く決めてくれれば良いよ」

突然の提案に驚いたクレアは目を白黒させていた。軽く決めるとは言っても、クレアの性格からして重く受け止めてしまうんだろうな。案の定難しい顔をしてしばらく考え込んだ後、決断した。

「右側にしましょう。何となくこっちのほうが良い気がします」

「よしわかった。じゃあ右でいこう。皆もそれで良いな？」

不満などあるはずもなくディアベルとシャリーが頷く。

シャリーはニコニコしながら頷いていたので意味がわかってないっぽいな。でも可愛いから許す！ 思わず無言で頭を撫で回すと、パタパタと尻尾を振って喜んでた。

まずダンジョンマスターを倒してから、ゆっくりとダンジョン内を探索する事も考えた。しかし勝てる保証もないし、ダンジョンマスターが弱ったところを皇子側の冒険者に出し抜かれたく無いので探索を優先させた。

しばらくは敵も出現しなかったもので、俺達はひたすら小部屋に入っては出るという単調な作業を続けていた。なんだろう、なんかベルトコンベアーで流れてくる刺身にタンポポを載せてる気分になってきた。

単調で退屈な作業のせいで、俺達の目から次第に光が失われていく。

無心で探索していると、中央にこれみよがしに宝箱が置いてある部屋に辿り着いた。

「ごしゅじんさま、なんか箱があるよ」

「主殿、あれはもしや……」

「ご主人様……」

皆の言いたいことはわかる。あれはどう見ても罠だろう。でもお宝の可能性もゼロではないので、一応調べてみる事にした。

部屋の四方に視線を飛ばし、吹き矢などの飛び道具が飛んでくる穴が無いかチェックする。次は床のタイルの配置が不自然ではないか、色が変わっていたりしないかを注意深く観察した。

部屋自体に罠は無さそうだ。って事は、宝箱自体が罠の可能性大だな。

考えられるのは鍵穴に毒針がある仕掛けだ。不用意に鍵穴に針金をつっ込んだり覗いたりすると、

針が飛び出してくる。

他には、宝箱を開けると毒ガスが噴出したり爆発したりする罠もある。

後はミミック——外見が宝箱そっくりで、うかつに近づいた冒険者を捕食する魔物である可能性だ。宝箱にしか見えないが柔軟性に富み、体をくねらせ飛び跳ねて移動する。

攻撃力は極めて高く、生半可な実力の冒険者だと一撃で倒されるとか。しかも厄介な事に、ミミックは以前戦ったゴーレムと同じで、動き出すまでは敵味方の判定が出来ない。

生憎と俺達には、本物の宝箱かミミックかを判定するスキルや魔法は無い。だがミミックの場合、体内にお宝が隠されている可能性が高いので倒したい。

ならどうするか？ 近寄らずに攻撃するのが一番確実だろう。

他の罠の存在を考慮して、皆を後ろに下がらせた。俺は少し離れた位置から炎の槍をイメージして魔法を準備をする。

撃ち出す槍の数は一本だけ。本物の宝箱だった場合、内部のお宝まで破壊してしまう恐れがあるので、数を絞ったのだ。爆発魔法は威力が強すぎて使えないから、この辺が妥当だろう。

「よし！」

覚悟を決めて宝箱に向けて炎の槍を放った。狙い変わらず命中して宝箱は炎に包まれる。

カタカタと震えるだけだったので、ミミックではなかったかと氷結魔法で消火しようとした瞬間、宝箱がバカッと口を開けて飛び掛ってきた。